

文法と論理に於ける主語の機能

両 角 克 夫

I 文 と 命 題

意識や思考の内容が言語化される場合、命題形式を経過する場合もあるし、そうでない場合もある。

A dog is an animal.

Yes, please.

Come.

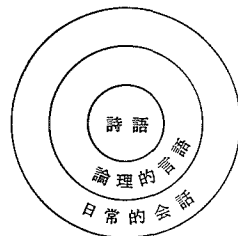
Good morning.

Thanks.

などの例を見ても、最初の文例以外は論理の形式、即ち命題の形式をとっていない。換言すれば言語表現は、論理以前、論理、論理以後の段階に分けられる。比較的簡単な内容を時間的空間的に共通な場に於て伝達する日常的会話などは、命題の形をそなえない感情的、自然発生的反射的表現で十分な場合が多い。然し複雑な内容を間違いなく表現し伝達するためには命題の形をそなえ、論理的形式をとらざるを得ない。詩などに於て、直観的表現が多いのは、論理以前のそれではなくて、むしろ論理を超え、高度に凝縮され洗練された言語表現なのである。図示すれば右の如く三つの同心円を描くことが出来る。

判断が言語で表現されたものが命題 (proposition) であり、命題は主辞 (subject) 賓辞 (predicate) 及び連辞 (copula) とから成立する。逆に、命題を分析すると、S.C.P. の三つの部分になるのである。CはSとPとの関係を示すものである。

多様な言語現象の中で繰返される表現の型を見出し、その構造を記述する場合、何等かの分類の基準を必要とする。そのためにもまず言語表現の単位を設定する必要がある。今一応 language の単位を word とすれば、speech のそれは sentence と考えられる。Alan Gardiner は、文の特質を次の如く説明する。



The characteristic feature of the sentence, as opposed to mere unintelligible words, is its purposiveness, the satisfying sense which arises from it that the speaker has purposed or intended something. (Speech and Language, p. 181)

この説明はすぐれたものであろうが、不明瞭な点もある。purposiveness, intention, satisfying sense とは一体何であろうか。この場合、話者と聴者の二つの立場があつて、この二つは一致しない場合もある。satisfying sense とは多分、聴者に対して伝達内容が完結する場合であり、purposiveness, intention とは話者の意識内容やその意図を内包しているのであ

ろうが、この二つは一致しない場合もあるのであるから、a word or a group of words が a sentence かどうかを決定する客観的基準を求めることは出来ない。結果としては、話者の purposiveness や intention が聴者に伝達され得た時、sentence が成立することになる。つまり、話者が聴者に分つてもらいたいこと (intention, meaning) が聴者に伝わり、又理解されるための媒介の機能を果す言語記号体系の単位が文といえよう。

C. Fries は文について下の如く Bloomfield や B. Bloch を引用して説明している。

A sentence is a construction (or form) which, in the given utterance, is not part of any larger construction. ……

Each sentence is an independent linguistic form, not included by virtue of any grammatical construction in any larger linguistic form.

上の Bloomfield の文の定義に於ては、結局、“utterance” が問題となるのであり “an act of speech is an utterance” と定義されるのである。これに対して B. Bloch は云う。

A single act of speech is an utterance. It is true that this definition, like Bloomfield's, leaves the limits of an utterance completely vague, and therefore fails to tell us just how much of speech an utterance is supposed to include. For our purpose, however, (phonemic analysis), the length or inclusiveness of utterances can be ignored.

これらに対して、Fries は結論的に云う。

The easiest unit in conversation to be marked with certainty was the talk of one person until he ceased, and another began. This unit was given the name “utterance”. (Fries : The Structure of English, pp. 20—23)

ここでは、文を定義するのに、the satisfying *sense* に対して an independent linguistic *form* と云う。これを総合して云えば自義的な意味単位としての独立的な言語形態が文であると云えよう。

然し、如何なる utterance も或る situation に於て誰かが誰かに何かについて自らの意識内容を伝えようとするものであつて、この“場面”こそ言語活動を促し要請する契機であると同時に utterance を成立させ、新しい場面形成への一要素としてそれを包含していくものである。

場面とは話者と聴者とと言 (speech) のみでなく意味伝達を可能にするあらゆる conditions を包む有機的言語空間なのである。全体としての有機的言語空間を離れて、語や語の集合を採集し、その型を定めたり、分析を試みると死体解剖に類する結果を招き易い。例えば、“Yes” とか “come” なる一語が文であるかどうかを決するものは situation であり context なのである。ただ situation は刻々に経過し、又一回きりのものであるから、これを学問的考察の対象とすることは極めて困難であり、便宜上時間を停止させ、瞬間の面を固定して対象化せざるを得ない。そして多くの言語活動に関する場面を比較考察することによつて、

その公約的要素を抽象整理し体系化する以外に方法はないのである。

言語活動とは人間の生活の場に於ける文化的社会的行為であり、言語学は言語主体の言語体験の反省に出発する。同一の言語文化圏は他のそれに接する時、自らの言語体験の反省の上に立ちながらそれを基にして外国語を理解し、比較の方法によつて共通な要素を見出し、言語一般の知識を拡大させ、体系化していくのである。言語活動は、心理的、社会的、文化的生活に直結しているものであり、言語活動を成立せしめる situation はそれらのものの有機的総合体であり、実際に生きて働く言語活動は、Humboldt や Wundt の如くそれを民族精神や思想と直結させ、並行させて考えることが素朴すぎるとしても、それらのものと深い関係をもつて成長し形成されて来たことは否定出来ない。然し言語学が一つの経験科学として発達して来た過程に於て、それが厳密さを自らに課すにつれ、客観的に捉えやすい言語の外的形態と構造に対象を限定し、その共時的記述と構造分析に集中する傾向を見るに至った。例えば behaviorism に根ざすと考えられる Bloomfield は言語を行動の一種と見なし、stimulus と response との機械的反應の中に言語の機能を捉え、科学としての言語学の対象となる“意味”は、idea, concept の如き心的なものの介入を必要とせず、話者に utterance を促した situation と聴者のそれに対する response そのものであると考えた。かかる傾向の上に B. Bloch や N. Chomsky の音素分析などを考えることが出来ようが、方法的に徹底することは、同時に視野を一面に限定することにもなり、今後の発展は期待されるが同時に自らの限界をも明らかにしていくであろう。極く簡単な日常的発話は別として、多少複雑な内容をもつ言語表現は、stimulus と response の間に understanding の場所を置かなくてはならぬ。understanding は内的心的活動であり、知的な作業である。同一の stimulus に対する response としてあらわれる行動も、聴者の理解の仕方と personality によつて夫々異つた形をとることになる。話者も、situation に促されて発話を行うとしても、話者の体験と認識を経てはじめて situation は具体的な stimulus となるのである。conditioned reflex の理論を言語に適用するとしても、外界に関する人間の感覚と表象は、實在の第一信号即ち具象信号を形成するが、言葉と言語器官から大脳皮質に行く運動興奮は第二信号、即ち信号の信号を形成するのであり、この信号は實在の抽象化、普遍化の傾向をなすもので、記号的象徴的手段としての言語は人間特有の高次の思考の道具となるのである。言語の抽象的概念記号としての性格は、思考作用によつて形成され発展して来たものに外ならぬ。思考作用とは普遍化抽象化の作用であり、概念の分析、概念と概念の結合の作用である。onomatopoeia などをのぞき、一語たりとも反射的に生れたものではなく、概念の記号として形成されたものであり、概念自身、判断を通じて得られるものである。概念は potential judgement で、judgement は展開された概念であるとも云えるのである。文を speech の意味単位、或は an independent linguistic form としての an utterance と解するとしても、文はとにかく命題を内包している。“come”がある context に於て、それだけで情意表現を完結する文の機能を果す場合は、I wish that you come. の如き命題を示唆する概念であると考えられるのである。従つてあらゆる文は、有形、無形の主語を内包するものと云えよう。とすれば、文に於ける主語の機能又は意味とは何であろうか。

Ⅱ 主語の多義性

主語とはアリストテレス以来、客語、即ち *kategoroumenon*, *prædicatum* に対して *hupokeimenon*, *subjectum* と呼ばれて来たところの命題の一部を示す名称である。

我々は思索し他への伝達を意図する場合、必ず何かについて、何かの目的で、有効な方法を講ずるのである。発生的に考えれば、発話の主題となり、対象となるものが *subject* なのである。これが命題形式に移される場合、主題は判断の主位概念を経て主辞に代置される。しかし、同一の論理判断に対する言語表現の方法と形は複数である。It rains. Rain falls. これは同一の事柄について同じ判断を下しているものであるが、言語表現の組立ては異なる。It rains. の場合、形の上での *subject* “it” は別に話題になつてゐるのではない。It is difficult to study English. の “it” と等しく、英語の表現を作るための一つの補助手段であつて、主位概念としての内容を持たない。

このように観て来ると、論理的主位概念と言語で表現される命題に於ける主辞とは一致しないのであり、論理的判断とそれを命題の形で陳述する言語表現の方法とは必ずしも並行しない。つまり *synonymy* と *polysemy* の現象が観られるのである。

又、It was yesterday that I went there. に於ける話題の中心は、“yesterday” であり、心理的には “yesterday” が *subject* であるが文の組立ての上からは “it” が *subject* であり、論理判断の形に直せば、I went there yesterday. であつて、その主位概念は “I” である。同じ “subject” なる用語を用いながらも、logical, psychological, grammatical, 夫々異なる場合が多いのである。M. Sandmann は “Subject and Predicate” pp. 80—81 で下の文を引用している。

Nous doutons qu'il soit possible, par des procédés purement grammaticaux, d'aboutir à dégager des termes tels qu'un sujet et un prédicat. (Hjelmslev : Principes de grammaire générale, p. 35)

更に *subject* そのものを論理判断からも排除せんとする主張も生じて来る。

Le sujet n'est pas un élément du jugement et, comme catégorie grammaticale, il est un accident du langage……Il faut exclure le sujet de la logique. (Ch. Serrus : Le Parallélisme logico-grammatical, p. 167 et p. 170)

そして、文法は意味には無関係であり (La grammaire est indifférente au sens), *prædicat* は文法にも論理にも属さないものであつて、*sémiologie* (記号学) に属するものであり、意味範疇と文法範疇とは峻別されるべきものと、Serrus は主張する。

論理に於ける *subject* はしばらくおいて、文に於ける *subject* は主位概念の記号ではない場合があり、むしろ文を導き文を組立てるための機能的単位であるとも云えよう。

言語は意味伝達の機能を果す一つの方法であるが、そこに要求されるものは、正確さと簡潔さとであり、これは互に他を排する性質をもつもので、この二つを同時に満足させることは困難であるが、我々は日常会話の中でこれを実践している。特に緊急の場合は、極度に省

略された方法が用いられ、正確を旨とする時は、まわりくどい悪文であつても論理的表現が用いられるのは当然であろう。

然し、論理 (logic) という言葉の意味を考えて見るならば、その語源ギリシャ語の *logos* は言葉、理性、思想などを同時に意味する多義的な語であつた。13世紀頃までには論理学 (logic) と呼ばれるようになったが、それはアリストテレスでは、学問的認識のための道具 (organon) でありストア派に於ては対話論争のための技術又は方法としての弁証法 (dialectic) を意味した。このように論理を広く解釈するならば、言語と論理、文法と論理の如き形で考察を進めるかわりに、進んで言語の論理、文法の論理を見出して行くべきであろう。その場合、記号の論理 (semiotics) 即ち *theory of signs* から考察を進めたい。

Ⅲ Semiotic Syntactics に於ける Subject の意味

20世紀初頭のアメリカ人 Ch. S. Peirce (1839-1914) は、デカルトにはじまる先験的方法の前提となつている直覚や内省の能力を否定し、思考作用を記号活動に移し、思考法則一般を取扱う広義の論理学を記号論に還元することを試みたのであるが、これを更に発展させたものが、Ch. W. Morris : "Foundations of the Theory of Signs" (1938) であろう。彼によれば *semiotics* は言語学、論理学、数学、修辞学、その他諸科学の基本的道具であつて、形式的科学、人文科学、更に自然科学をも包括統一せんとする記号の学である。Morris によれば記号は三つの次元から考察される。

(1) 記号とその使用者としての人間との関係を取扱う, *pragmatical dimension*. 即ち、心理学、社会学、言語使用の歴史を含む *pragmatics*

(2) 記号とそれが指示する事物や事象との関係を取扱う *semantical dimension*, 即ち、真理の理論、論理的演繹の理論を含む *semantics*

(3) 記号間の関係を取扱う *syntactical dimension* 即ち、科学の言語に適應された命題構成法としての *logical syntax* 又は形式化された計算の論理をも含む *syntactics*

subject の意味も以上の三つの次元に於て夫々異つた意味をもつのである。(1)では発話全体の関心の中心をなす主題であり、(2)では命題の主位概念であり、(3)では形式的文法的主辞である。この三つの意味をもつ *subject* は重なり合うこともあるが一致しないことが多い。相対的に夫々異つた次元の用語であるから夫々異つた色合をもつのは当然のことである。これら三つの次元は混同されてはならないが、より高い次元で総合されることによつて、新たな知識の体系を形成して行くべきものであろう。

記号と使用者との関係は、具体的な人間関係の状況と発話者の *personality* の下で成立するものであり、余りにも複雑であつて、語用の論理を一般的な論理に定式化することは出来ないが、統計的な計算にもとづく確率的な論理で考えることは出来よう。

又記号とそれが指示する *referent* との関係を取扱う場合、言葉に対する *referent* が実在すると考えたり、記号が事象を描くと考えたりしてはならない。記号と *referent* との間には直接的な因果関係は何もない。それは人為的に作り上げられた社会的約束 (*convention*) にすぎない。この故に言語体系は第二信号系と呼ばれるのである。以上二つの次元は、ともに個人や社会の特殊で複雑な差異の影響下にあるのであつて、そこから一般的な定義を導き出すことは殆んど不可能であるが、第三の次元、即ち記号と記号との結合の仕方には、各国語

の種差を超えて共通な関係の定式が得られそうである。そして、semantics も現在では、syntactics の中で syntactic meaning の学として一般的考察の対象とされる。とすれば、subject は syntactics ではどのように説明されるであろうか。ここで所謂構造言語学と呼ばれる方法で英語を取扱ったものの一例として、C. C. Fries の “The Structure of English” を一瞥してみよう。この書物では、syntactics が根柢となつてその英語学の体系が出来ていると考えられる。syntactics は structure に代置出来る用語であろう。そこでは subject はどのように把握されているであろうか。

まず Fries は、言語表現と実在とを切り離す。

It is necessary to insist that such terms as “subject”, “indirect object”, “direct object” have no relation to the actual facts of a situation in the real world. As grammatical terms they are simply names for particular formal structures within an utterance. …………… “Subject” then is a formal linguistic structural matter; it is a particular construction for a Class I word……(The structure of English, pp. 175—6)

そして Fries の語類の分け方の基準は、functioning units in structure 即ち syntactic form-classes にかかわるものである。即ち form-classes or parts of speech は、(1) structural pattern に於ける位置 (2) 語自体の morphological marker (3) function words との結びつき、などによつて決定されるが、(1) が優位を占めるのである。これによつて文型を分類すると、(1) Question : II + I (2) Request : II (3) Statement : I + II となり、“Subject” is the technical name for the Class I word that is thus structurally bound with a Class II word. (S. E. p. 176) となるのである。そしてかかる subject のもつ meaning としては、

The man gave the boy the money yesterday.

The boy was given the money by the man yesterday.

The money was given the boy by the man yesterday.

The giving of the money to the boy by the man occurred yesterday.

Yesterday was the time of the giving of the money to the boy by the man.

に観られる如く多様であり、行為者を意味する場合はほんの一例にすぎない。ここにも Fries の structure→meaning の徹底した方向が方法的に明白になる。meaning から structure への方向は完全に排除されている。Fries は、尙未だ referent の意味にたよる点があり、かぶせ音素 (supra-segmental phoneme) に対する考察が不充分であると評する人もあるが intonation は英語では意味の分化に直接関与しない二次音素であり、Fries に於ては、形態と意味とを分けようとする努力は方法的につらぬかれていないと云えよう。ちなみに、Jespersen の “three ranks” 説に於ては、思想上の構造と形式上の構造との混同が潜在すると批判する O. Funke は Marty の Autosemantika, Synsemantika の範疇を援用することによつて、事はより明白になると指摘する。又 Jespersen の用語 “function” も notion (概念) と form (形態) とを媒介する中間領域ではあるが、何か曖昧な二重性を残すとされる。Jespersen の方法が首尾一貫していないと評することの可否は別として、一つの方法を徹底させることは必要ではあつても、それによつてどれだけ対象の認識が完全に近づくかは又別の問題であり、結果によつてその方法の価値が評価されなくてはなるまい。又方法の価値は、その適応範囲の広いこと、手

続きの簡明なこと、などによつても測定される。構造言語学の方法の評価は他にゆずるとして、現代の論理学に於ける subject について一瞥しよう。

伝統的な論理学は人間の知識の単位を概念と考へ、概念と概念の結合を判断とし、二つの判断の組合せからより高度の第三の判断を導く三段論法へと展開する。このような、主語—述語の文構成の論理化としてのアリストテレス的論理は、logic of terms (名辞論理学)であつて、そこでは真に存在するものは語又は概念に対応する実体であり、世界とは名詞に対応する事物の総体とされる。これに対して Wittgenstein などは、世界は事物の総体ではなく“Tatsache”の総体であると言ふ。即ち物ではなくて、事柄や事態、出来事、関係などの総体である。命題の主辞と賓辞の包摂関係を中心とするアリストテレス流の logic of terms (名辞論理学)に対して、命題と命題の結合関係を出発点として、一つの文の主語も述語も夫々それに対応する文の結合として考へる logic of propositions (命題論理学)は、文の作り方ではなく、知識又は思考を出発点とするものであり、これはあらゆる状況に於て、すべてのものについて語ることが出来るような語法上の論理を、より統一的な原理のもとに体系化せんとする学問の方法論上の要求から来ている。すでに、近代科学は中世以来の実体論的存在論からはなれて、関係の数学的把握から出発して来た。この方法を主語に適應するならば、語の意味は、ある具体的状況に於けるその語の機能であり、即ち構文論的な結合の確率的分布の問題となる。思考と実在は直接結びつくのではなくして、媒介者を必要とするのであつて、それが広い意味での論理であり、記号であり、言語なのである。言語は非連続的な記号体系であつて、それによつて情報が組立てられる。

文と文との結合を問題とする logic of propositions に対して、一つの文の中の主語部分と述語部分とを区分し、“すべて”“或る”など分量限定詞をも加へ、構造を明確にした上で、文と文との結びつき、その妥当性を決定する論理を predicate logic (述語論理)と呼ぶ。まず、絶対に述語になり得ないようなものを主語として他の一切を述語として用いることによつて predicate logic は始る。第一次 predicate logic で述語となつていたものを主語として、さらにこれに述語を与へて行く高次述語論理を展開していく。第一次 predicate logic では、無限定の“或るもの”を基本的な主語とする。つまり主語は全く functional なものである。つまり Mary is a girl を, (x is Mary,) (x is a girl) なる最も基本的な、subject—predicate からなる二文の組合せと考へ、S—P の命題を ‘Fx’ ‘Gx’ の二文の結合と考へる。どうしても疑い得ないような存在としての“或るもの”を唯一の主語、及びそれに対応する存在者と考へ、他のすべての一般的な存在者、たとえば“人間”と云つたような集合名詞が指す存在者を、初めから独立した存在者と認めない。あらゆる状況で、すべてのものについて語り得るような語り方の方法を、より統一的な原理に体系化せんとする。集合や class の如き抽象的なものを一つの存在と認めるのは、論理学の統一的な構成上便利だからであり、全く形式的、方法的問題なのである。ただ、predicate logic に於ては厳密な述語計算が要求される。

もし、言語が実在の反映とするならば、すべての述語の中核であつて、時、空に於て不変の実在、即ち第一実体があると考えられる。プラトンの“idea”は集合名詞に対応していたのに対してアリストテレスでは、第一実体は固有名詞に対する個体である。そこでは、固有名詞こそ述語の位置に来ることの不可能な真の意味での主語と考えられた。述語は多くの異つた個体に共通であるから、これに対応する存在は普遍者と考へられ、集合名詞は主語の位

置にも来るために、これは第二実体と呼ばれた。然しかかる logic of terms は predicate logic へ発展していくにつれて、実体論的存在論から関係を中心とする函数論に移行して来た。即ち instrumental logic としての“organon”のアリストテレス本来の意味が生きて来たのである。このように考えるならば、subject なる用語は保存する必要もないのであるが、それを保存するとすれば、全く機能的なものに与えられる名前にすぎないのである。言語を自己と世界とを結ぶ媒介者の一つと考える時、世界をより明確に把握し、これに有効に働きかける方法として創造された言語をより正確に、一般的にする努力は、現代論理学の土台となつてゐる semiotics の探究と結ぶことによつて良い効果をあげるであろう。syntactics は、記号間の機能的関係の学であり、構造言語学に於てはそれを一定の pattern として捉えようとするものであり、共通な課題と方法を抱くものである。

然し structure や syntactics が言語学に於ける唯一の領域ではないのであつて、複雑で困難な pragmatics や semantics の言語学は更に発展されるべきであろう。勿論夫々の領域は混同をさけ、それ自身として発展されるべきものであるが、より高次の次元に於て総合統一されるべきものである。それが、言語とは何かの問いに応ずるための今後の具体的な目標であろう。

Ⅳ む す び

Saussure に始る共時的記述の方法による所謂構造言語学は現代の言語学の主流となつて来た。Trubetzkoy や Jakobson を中心とするプラーク学派は心理的、Hjelmslev を中心とするコペンハーゲン学派は哲学的、Bloomfield を中心とするアメリカ言語学は分析的で pragmatism や behaviorism の傾向をもつとしても、共に夫々の国語はそれ自身の有機的体系をもつと考え、個々の要素をその有機的構造、syntactics の中に位置づけ、その構造の中での機能を分析しようとする。従つて言語を reality からは一応独立した音声記号の体系と考え、その elementary particles とも云うべき音素を捉え、その結合法則としての型と部分の全体に対する機能的性格を記述しようとする。

一方現代の論理学の傾向も、実体存在論的性格を脱して、関係を中心とする機能的函数的な syntactics に移つて来た。これは世界観的に云つて、realism から formalism, functionalism, nominalism への移行とも考えられる。

又現代の造形芸術の世界に於ても、抽象的傾向が強く、内的外的に referent をもたない線や面や色彩の有機的構成体としての造形的空間を提示するものが多い。それは記号を感性に代置した世界とも云える。

文学批評に於ても、所謂 New Criticism と呼ばれるものは、もつばら作品の形式面について分析批評を行うことをもつて特色とし、その対象とするところは思想ではなく、客観的形体としての文体、用語、imagery、象徴、構成など作品の形式的的方法的技術面である。

以上の如く様々な人間の知的な分野に於て、相対的現象が起つてゐると云える。それは一口には説明し難いのであるが、視点の実体から相対的關係への移行、内部世界に対する不信から外部に客観的なよりどころを求める傾向などである。これらは今世紀の Zeitgeist の一面を示唆してはいないだろうか。

以上の傾向は増々技術的専門的になり、局所的微視的になつていく。そこでは、厳密さと

専門的な訓練が要求される。と同時に、存在に対する形而上学的関心はうすらいで行くのではないか。pragmatism 自身, 生を技術の面, instrument の例から捉えようとする。そこには世界に於ける人間存在の意味の探究が忘れられてはいないか。本来的な存在の意味を, 言語現象の中で実証的論理的に捉えようとする言語学がやがて新しい次元で要求される日が来るであろう。それは reality と言語とが再び新しい関係に於て結びついて考察される日を意味するのである。(1963. X)

注

この小論文作成に際し、言語学関係以外に下記の著述を参考としたことを附記する。
沢田允茂：現代論理学入門（岩波新書）
平凡社：哲学事典

Summary

Function of Subject in Grammar and Logic

by **Katuo MOROZUMI**

It is generally said that grammatical subjects do not always coincide with logical or psychological ones. In this essay, however, the author tried to find common aspects of logical and grammatical subjects in the field of semiotic syntactics, where they are treated of as functional or instrumental.

We can say that to-day's logic is "logic of propositions" and "predicate logic." When we compare this kind of logic with structural linguistics to-day, we can easily find that they are both syntactical. The meaning of "subject" here is not substantial as in logic of terms, but quite syntactical or structural.

The meaning of "subject" in pragmatics dealing with relations between mankind and signs, that of "subject" in semantics dealing with relations between signs and referents, and that of "subject" in syntactics dealing with relations between signs themselves are different from one another, but the author proposes to synthesize these in the higher field of metaphysical dimension.